

資料

佐伯と國水田独歩 (三)

「欺かざるの記」より

会員 山 本 保

独歩は、明治二十七年八月一日佐伯と別れを告げました。八月以降の「欺かざるの記」を掲げます。  
鶴谷学館時代の教え子、富永徳磨、山口行一、並河千吉、尾間明哥との友情がにじみでてゐる日記です。その交流は、羨ぐましいものがありません。  
(明治二十七年は独歩二十四才、旧かまづかいによる)

明治二十七年八月八日

富永徳磨(佐伯舟遊分教場勤務)外三氏に書状を發す。  
佐伯出發後、數日米、今日に至るまで十數日、淡々たる俗累に繋かれて、吾が胸底激昂の感慨は静まりぬ。  
俗累俗情吾を囲みぬ。炎々たる猛火消えて跡なし。  
静かに神に對し、徐ろに自然を視るの幽懐何処に去りぬ。  
時々の曙光なきに非ざれども、要するに夫れ余りに時々なり。

嗚呼願はくば吾に瞑想の時と場所とをよへよ。

八月十一日

富永徳磨氏の家庭をどり、一編の小説を執筆中なり。

八月十三日

富永徳磨氏より來狀、直ちに返書。  
少年八名(鶴谷学館の生徒)に一書を送る。岡村(哉)、栗屋(式考)の両氏にも示。

八月三十日

佐伯なる少年生徒の中より來狀。

九月二日

佐伯より電報來りぬ。彼等(教え子)は出立したる也。明夜は若も上京(山崎柳井前より)の途に上るべし。遅くとも明後夜は、己に是等の青年を率ゆ。如何なる事ありと失望的言行ある可からず。如何なる事ありと雖も薄志弱行なるべからず。嗚呼神よ。大なる全能の神よ。常に汝の前になりて是等青年を率えし給へ。彼等をして剛健なる義人たらしめ給へ。嗚呼吾をして人を愛せしめ給へ。神よ。

九月四日

瀛海中にて此の筆を執る。  
昨夜岸へ下港に乗船して今朝宇品港に着し、宇品にて富永、山口の両氏と会い、再び乗船して大阪に向つて發す。

今日午前十時其渡航中であり、同行約束者の中、展間、並河は故ありて吾等におくられたり。

(註) 九月六日独歩東京着。同行者には故二反に独歩と慕つた。佐伯の子弟二人富永徳磨、山口行一がいました。

九月七日 雨濛々。

本日午前、吾独り車にて麴所(東京)に來り、下宿屋を定めて帰館、直ちに三人(佐伯の子弟)を伴ふて茲に移転す。茲とは麴所三番所九番地なり。富永氏と伴ふて神田と散歩す。

(註)九月九日、(一)いて教之手匠開明、並河平吉が上京して、独歩と合流しました。

九月十二日

十二日一時間余すのみ。吾等六人は昨日を以て故、則ち牛込南樓所に転居したり。パンを以て自炊の生活を始めたり。今日日昨夜の暴風に引きかへて晴天白日なりき。(徳富蘇峯氏を頼る。)

(註)徳富蘇峯一熊本巣出身、民友社社長、國民新聞社社長、独歩と側面から援助した人。

九月十三日

八月一箇月の柳井村宮本(山口県柳井所)の生活。昨年十月より今年七月まで佐伯十か月の生活。今またパンと水との生活。

九月二十七日

昨日並河平吉氏吾等より別居せんことを申出づ。為めに吾も彼との交を絶つに至る。

九月二十九日

昨日並河氏終に去りたり。

十月十日

本日三番所より平河所五丁目一番地に転居す。経済上の都合なり。

吾等の貧乏次第に貧なり。パンと芋とを食ふのみ。肉一片も食はざるなり。

山口行一氏都合ありて吾が仲間を去り、食家となる。

(註)匠開明もその日記に「勿論かまども無ければ釜も煮いさず生活を、神楽坂までパンを買いに行つたが、そのパンも平河一蔵二屋といふ店に買ひ、おいぶん質素な生活であつた」としたためています。

住居も、麴所三番所九番地から牛込南樓所、そして平河所と丁目とかわりました。

十月十六日

慶尚より電報來り艦隊乗込(日清戦争後軍記者として)の都合首尾よく出来たと報じぬ。直ちに用意を取り掛り其の夜九時五十分新橋駅の車にて出発す。秋雨蕭々人見、收二、富永、今井、匠開、かき、田氏は送らる。

十一月一日(癸大連)

富永徳磨より書状と得たり。佐伯の生活は吾として自然に近づかしめたり。中の谷を思ひ元越山を思ひ尺間山を思ひ鎌子の麓を思ひ、黒沢の桜を思ひ、香近の月を思ふ。

嗚呼過去！時！不思議なる哉。過去とは何事ぞ。過去とは空乎。

明治二十八年一月十五日

日清戦争後軍千代田艦にて(廿五歳)

若し夫れ佐伯の「自然」に近き生活を思ひ起すも、此の時代なり。自然、魂は己に半面苦悶の影を捕えたり。

回想の快事は無心なり。

(註) 従軍記者となり、徳富蘇峰編集「國民新聞」に戦事通信を發表しました。

三月九日

従軍記者としての任務終る。

五日に吳港に帰り、其の日直ちに返艦して赤島に帰る。そして東京へ。

三月十三日

夜、富永徳慶氏来訪談話。

五月一日

本郷なる大学病院に並河平吉氏と見舞ふて今更帰安す、夜十時なり。

富永徳慶氏を同伴せり。

富永氏と行くノ、人生の不可思議を語りぬ。並河氏は脚氣病なり、枕頭下をうて醫時ものがたりぬ。富永氏の家庭の不幸をきく。

五月十二日

社中(國民之友)小品に「豊後国佐伯」の題にて十日十一日、十二日の三日間連載したり。吾が哀感これに由りて、深く佐伯生活の當時を回想のうちに動きぬ。

「豊後国佐伯」に就ての執筆は、吾をいざ次の如き発見を得しめたり。則ち、作れ、然らば成らん、然らば発明する処ある。作れ、然らば自から情趣観察の発達を見ん。

今日午前教会堂に出席して植村正久君(牧師)の説教をきく。午後は富永徳慶、尾間明、山口行一の三氏と共に

に並河平吉君を本郷大学病院に訪ひぬ。それより上野に出で遂に道せん山の方まで散歩したり。

(註) 植村正久、独歩に洗礼をさすけを東京麹町一番所教会の牧師、日本キリスト教会の先覚者。

五月二十二日(日曜日)

午後、富永、尾間の両氏と收二同道にて牛込より小石川の郊外を散歩したり。

帰路、富永氏等を顧みて曰く、吾等天國の郊外に在りて又手を携へ散歩したるものならざれと。

吾、自から斯く認め、時以無窮の愛、限りなき希望を感じぬ。

七月六日

山口行一氏脚氣衝心のため死去したる旨、午前九時頃尾間明氏より通知し来りしが故に直ちに牛込に赴く。茫々乎として夢の心地す。

七月七日

一日を正しく送りて安らかに眠らしめ給へ。

山口行一氏の父母の悲を和らげ給へ。

人間に死を深く思はし給へ。

此の不思議なる汝の言を感銘せしめ給へ。

七月九日

七日の朝、山口行一氏の葬式に会し、落合村火葬場に至る。

山口行一氏の事を記して家庭雜誌に投ずる。

七月十日

午前十一時四十五分祭の汽車にて山口行一氏の可児、骨を携へて帰郷するを送りぬ。

七月十一日

吾が友、山口行一は死したり、突然死したり、神よ、死の恐ろしき事実を痛感し得て、永久の命なる套語に真意あることを教へ、吾れをして、英語と樹乙語とに通達せしめ給へ。吾が勉強を助け給へ。吾が父母と安からしめ給へ、行一氏の父母の悲し私に給へ。

七月十六日

昨夜宮崎湖処子未定談話。氏吾に才すむるに佐伯滞在の中、事を著作に現はす可きを以てす。

(註) 宮崎湖処子は独歩の吹雪で「ワースワース詩集を推せんし人です。

七月二十日 降雨連日

「佐伯に於ける一年の生活」に就て熱血をそむる程に著作せんと決す。

此著作を以て昔旧生涯を閉ぢ、直ちに北海風雪<sup>（註）</sup>のうちに扱せんことを期す。

(註) 北海風雪云々は、念願といふ北海道行きのこと。

七月二十一日

薄暮芝公園を散歩す。帰りて「取かざるの記」(佐伯に於ける一年の生活)を作りはじむ。緒言八枚を作り了はる。

八月六日

分の麦藁帽。之れ山口行一のかたみなり。彼れ今何処にある。死の國には友多し。友多し、友多し。行一もあり。武雄もあり。

八月二十三日

昨朝富永徳磨氏を訪ふ。一昨夜吾れを訪ひしも吾れ不在なりし。氏が妹の事に付て相賛する処あり。上京の旅費を吾れより支出しよふる事に定めたり。

昨朝、富永氏辰間氏共に新居なるはぐ城支店に在る。

十月八日

昨夜富永氏等未定、其妹米京。吾等諸友相協力して天職を尽すべしと語りぬ。

明治二十九年四月二十一日 (独歩二十六才)

夜、富永徳磨氏来り、談話悲痛と松ふ、辰間、大庭兩氏来る。

四月二十五日

夜、今井、田村、田宮、辰間の四氏未定、收二と六人、同座して談話す。

余が北米行(独歩米)の可否を論、極めて盛なりき。富永、田村の兩氏は否とし、今井氏は可とせり。收二は賛成なり。

富永は余に才、むるに忍耐して今日の境遇を続可きと以てせり。余もまた此を思はざるには非ず。

(註) 田村は田村三治、東京専門学校(今、早稲田大学)時代より(元)

五月四日

余は苦悩のうち在り。されど植村正久、内村鑑三、

宮崎八百吉（胡次子）、富永徳麿、今井忠治等ノ諸友ありて余が精神を鼓舞し、奨励し、慰藉しつゝあり。此カ点に於て余は幸福なり。

（註）山村鑑三ノキリスト教員ノ指導者、後日本基督教ノ思想家。今井忠治一山ノ基督教員ノ友人、後年判事となる。

明治三十年一月七日（独歩二十七才）

富永徳麿氏に、亦めし件（昔富永の妹と及び対する求婚）の成否は凡て神にまかす。神よこの願をかなはしめ給へ。

一月二十二日

夜記・佐伯滞在の頃の欺かざるの記、及び其の乗継中の記、乗継後の記など、今讀み来れば其の跡をたどる如き心地する也。佐伯に於ける生活など、これを通じて如何にわが感情を變化したるよ。

嗚呼、元越山よ、阿蘇の峰よ、富士の流氷よ、あゝわれ彼ノ九州を會と思へば愈々人生の不可思議なるを感ず。世の政治家をして其の功名心を弄せしめよ。世の文人をして其の空文をたのしましめよ。願はくはたゞ吾をして何時も何時も心、浮世の波に迷はんとする時、彼の乞食を思はしめよ。あゝ憐れの靈。今如何にしたる。あゝ人の子よ。今如何にしたる。

あゝ神よ彼の人の上をめぐら給へ。あゝ憐れの少年よ、人生とは何ぞや。あゝ人生の目的は何ぞ。あゝ彼の乞食を思へば此間の意味の一段に深きを覺ゆ。

一月二十三日

人を怒り、人を恨むる勿れ。反りてこれを自家に顧みよ。徳を建てよ。育体に言へば富永に對する不平、豊壽に對する不平より甚だし。豊壽氏は余を真に知ら

ざる故に無理もなし。富永は余を知れり。嗚呼ちが品性の醜汚なることを。神よ、美は善しきに導き給はんことを。何事も極理ならんかし。

（注）豊壽氏一東京日本橋釘店、後城城院長夫人、キリスト教員。人倫社会幹事。

三月十一日

昨夜、植村正久氏を訪ふて、富永との交情衝突につき、教訓を受く。昨日宮崎君より老々のことと聞きぬ。今日、田山、尾

開西氏未定。記すべき事、極めて多く、記せず。（注）田山花袋、小説家、田舎教師、作者、独歩の友人。

五月十三日

今日「源叔父」の清書を了りぬ。半紙三十枚なり。

五月十八日

本日「源叔父」を太田氏まで送りぬ。（文章集編輯部八月）

あとがき

独歩を慕つて上京、苦樂さともに分ちあつた教之子四人のうち、並河平吉と山口行一の二人は、不幸にも病死し、富永、尾開は生き残りました。

富永徳麿氏、本郷駒込教会において牧師として名を挙げ、その主唱する新精神や多くの著書は、当時の思想界に大きな影響を与えました。

民間明使、国民新聞広告部長を最後に、東京都の社会事業に尽しました。

独歩排斥運動のリーダーだった石丸敬一（橋本淳館）

（以下27ページ下段を参照）

害を防ぎ、稻垣橋を経て樞野橋に達する堤防は、各地の管理もよく安全である。

昔、灘の上荷船が通っていた上岡の木炭問屋宮崎佐市さんの裏川には、高島の井堰が設けられ、下流は禁漁区に指定されている。又高島には興人への興国人頼バルプ工場への水源地があり、樞野橋の上流には堤内川が合流して番五川に達している。

先覚者池田三平さんは、水害のない所づくりに貢献した故を以て、市制施行三十周年の記念式典に参列の光栄に浴したことを、終生忘れることはできぬと感激している。

市会議員池田静男さんは、郷愁はにわかにはかたがたいが、又部津留や女島津留に耕地を持つ地所として、牛馬の輸送に舟便をかりずすゑ、至極便利になつたと述懐している。

又長前田又一郎さんは、家や宅地を河岸の敷地に提供して、現在の土地に移転したのだが、母手水害を受けていた昔に比べて、心配のない安定した農業経営が出来ること喜んでゐる。

河川改修十二年度案によつて八反四畝の水田を、十八年度案で一反四畝の提出をした前田新作さんは、年間一人の労働者を雇つて、手広く稲作主体の農業経営を続けたいが、祖先伝来の水田一畝歩ほどを失つたことに愚痴もこぼさず、水田に五反歩ばかり水田を購入し、耕耘機を導入して植付、刈取りの労力を省き、水害のおそれのない場所には牛舎を設け、年間二十頭から二十五頭の肥育牛をはじめ、採草地の草を利用して濃厚飼料を採之、冬は青草のない時期にそなえて燕麦を播き、春は草の多い時には紫雲英の乾燥貯蔵につとめ、飼料を増産貯蔵に

専念大いに工夫研究している。飼育日数一年から一年四か月の期間中は、肥育牛を市場に出荷して巨額の収入をあげている。子供は大学と卒業、孫は農業高校を卒業させ、畜産主体の農業経営にあたり、又部落の同志と相成り、畜産技術の向上に研究会を開くなど、この道の先駆者となつてゐる。即ち昨年十月大分県肥育牛品評会に於いて、牝牛六ニニト三四八〇〇田で優等賞。又一昨年去勢牛五四五八、二八九〇〇田で一等賞。年六回調催の家畜市場にいつも三頭内外を出荷して、趣味と実益兩つながらを兼ねた文化生活を楽しんでいる。

旧番五川(船頭所川)は、昔は鶴谷城の堀の役目とめていた。この堀も埋められて、かつて船頭所の船着場も埋められ、延長一三二、五米の池船橋も二八米程に短縮され、池船橋と城南橋の中間に新しく橋の工事が進行し、船頭所側に商店街が計画され、埋立地の分譲も希望する者が多いという。

明治、大正、昭和と世の中は度つたが、番五川の左岸すまゝも変化がおびただしい。河川改修による番五川は流路が南に移つたことになり、兩岸の堤防は堅固に完成し、うんと広くなつた川幅、そして長く高く架つた鉄つかの永久橋が次々に出来、今も且ての洪水による惨禍は全く忘れ去られようとしている。(おわり)

〜32ページ下段よりつづき〜

生徒にも上京して、独歩編集の近画報、戦時画報社に入り、独歩と共に働きました。文才に秀でて、紫水と号してまいりました。